

第 1528 回 京都市教育委員会会議 会議録

1 日 時 令和 7 年 6 月 26 日 木曜日
開会 9 時 00 分 閉会 10 時 40 分

2 場 所 京都市総合教育センター 第 1 研修室

3 出席者 教 育 長 稲田 新吾
委 員 笹岡 隆甫
委 員 野口 範子
委 員 石井 英真
委 員 松山 大耕

4 欠席者 委 員 濱崎 加奈子

5 傍聴者 なし

6 議事の概要

(1) 開会

9 時 00 分、教育長が開会を宣告。

(2) 前会会議録の承認

第 1527 回京都市教育委員会会議の会議録について、全委員の承認が得られた。

(3) 議事の概要

ア 議事

議案 2 件、報告 2 件、勉強会 1 件

イ 非公開の承認

議案 1 件、報告 1 件については、市長の作成する議会の議案に対しての意見の申出及びその他の関係機関と協議等を必要とする事項に関すること、個人の権利利益を害するおそれがある事項に関する案件であり、京都市教育委員会会議規則第 3 条に掲げる「非公開事項」に該当するため、京都市教育委員会会議規則に基づき、非公開とすることについて、全員の承認が得られた。

ウ 非公開の宣言

教育長から、議案 2 件、報告 1 件、勉強会 1 件について、会議を非公開とすることを宣言。

エ 報告事項

報告 京都市子どもの読書活動推進のための取組指針策定について

(事務局説明 嶋本 学校地域協働推進課長)

子どもの読書活動に関する施策を総合的・計画的に行うことを目的として平成 13 年に制定された「子どもの読書活動の推進に関する法律」を受け、本市では平成 16 年に「京都市子ども読書活動推進計画」を策定した。以降、国の計画に準じて 5 年毎に改定を重ね、家庭・地域・学校等との連携のもと、子どもの読書活動の推進に向けた様々な取組を展開している。

今年度に計画期間を終える第 4 次推進計画後の読書活動の推進については、予測困難な時代にあつて時宜にかなった取組を機動的に展開し、また、より一層のわかりやすさと取組の集約化・重点化を図ることを目的に「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」を新たに策定することとする。

策定にあたり、有識者の知見を聴取するため、社会教育委員会に読書専門部会を設置し、

国の読書活動推進計画や、今年度、本市で実施するアンケート調査の結果等も踏まえながら策定を進めていく。

取組指針策定の趣旨について、別紙の社会教育委員会議への諮問文に趣旨を記載している。1つ目の段落、「子どもの読書活動の推進に関する法律」にある読書活動の意義「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていくうえで欠くことができないもの」という考えの下、本市の読書活動推進施策としては、現在、第4次読書活動推進計画を進めているところである。

2つ目の段落、子どもの読書活動の実態について、全国的な調査では、どの校種も平均読書冊数は増加しているものの、不読率は学年が上がるにつれて上昇傾向にあるとされている。

3つ目の段落、新型コロナウイルス感染症前後の生活様式の変化、GIGAスクール構想によるICT環境の整備等により、子どもたちを取り巻く環境が加速度的に変化する中、子どもたちに必要とされる資質・能力を育む上では、今後も読書活動の推進は不可欠であると考えている。

4つ目の段落、そのため、今年度が最終年度となる第4次推進計画後の本市の読書活動の施策については、読書環境の変化に応じた取組を、予測困難な時代に、タイミングを逃さず機動的に展開することを想定し、これまでのおよそ5年ごとに改定を重ねていく計画の形ではなく、家庭・地域・学校等が主体となって重点的に取り組む内容を示した「京都市子どもの読書活動推進のための取組指針」を新たに策定することとした次第である。

なお、より一層のわかりやすさと取組の集約化・重点化を図るうえで、成果物の形態としては、従来の計画の冊子形式ではなく、6ページ程度のリーフレットとすることを検討している。

教育委員会資料の1ページ目のとおり、京都市社会教育委員会議 読書専門部会において、取組指針の策定にあたり、先ほどの諮問文により、教育委員会から社会教育委員会議へ諮問をし、より専門的・集中的に協議するため、読書専門部会が設置された。

「ア」について、設置期間は令和7年5月1日～令和8年3月31日までとする。

「イ」について、委員は、社会教育委員から読書や活字文化に関わりの深い4名の委員の皆様、さらに外部特別委員として、従来の読書計画の策定に長年ご協力いただいていた京都ノートルダム女子大学の岩崎れい教授に就任いただいた。

「ウ」について、取組指針策定までの流れは、次のページを参照いただきたい。

現在、①②を終え、専門部会で協議を重ねてまいる。今後③④専門部会の内容について社会教育委員会議に随時報告され、⑤最終報告をもとに⑥社会教育委員会議から教育委員会事務局に意見まとめを答申いただく。答申を受けて、教育委員会事務局では、⑦教育委員会議にご報告のうえ⑧今年度末に取組指針案を策定する。

策定までの具体的なスケジュールは、「エ」のとおり。

次に、専門部会の内容については、次ページの(2)、5月23日に実施した、第1回読書専門部会の様子を紹介する。

実施内容について、まず、事務局から第4次計画に基づく取組等を説明し、続いて専門部会で議論いただく論点案を6つ提示した。次に、第1回部会では論点①「読書活動の意義と発信について」を議題とするにあたり、脳科学者の立場から読書の意義について論説されておられる、東京大学の酒井邦嘉教授から「脳科学から見た子どもの読書活動の重要性」について、ご講義いただいた。

そのうえで協議を行い、その内容は「ウ」のとおりである。

論点として、子どもたちが、限られた時間の中で、読書をしたり、読書の優先順位が上がったりするようなきっかけづくりを行うため、あらためて、社会の変化を踏まえて、読書活動の意義について考え、また子どもや保護者、学校等への効果的な発信について意見交換いただいた。

今回は少し時間が限られた中であつたが、委員から様々な意見をいただき、主な意見を資料に記載している。

そもそも読書なんかなくてもいい・大切ではないと思っている子どもや保護者に対してどのように発信するか、どのように取組を展開するか。その際には実利的なメリットを伝えてはどうか。また、子どもによって家庭環境が異なり、それを変えることが難しい中で、学校の役割の重要さの指摘、公的な空間に本を置いてはどうか、などご意見をいただいた。

読書の意義・発信方法については、論点全体を通じたテーマでもあり、今後の部会全体も通じて意見をいただきたいと考えている。

最後に、児童・生徒の読書の実態を把握するためのアンケート調査について、取組指針策定にあたり、今年5月に、京都市立小学4年生から中学3年生までの児童生徒及び保護者と、京都市立高校1年生から4年生までの生徒を対象に、読書の実態を把握するためのアンケート調査を行った。

主な質問内容として、平成30年度に行った同様の調査で設けていた、「読書が好きか」、「大切と思うか」、「普段の読書量」などに加えて、今回新たに、「本を読まない理由」や「読みたいと思うときはどんな時か」、「学校での探究活動と読書量との関係」、「インターネット上での文字・活字を読む量」、さらに高校生には、「読書が大切だと思う理由」や「将来必要な時に、読書をするための能力や姿勢が身に付けられていると思うか」についてなどを質問した。

現在、鋭意集計・分析を進めているが、(4)結果概要で、いくつかの項目について速報値とその特徴・傾向を記載している。

①幼い頃の家での大人から子どもへの読聞かせについては、減ってきている様子がうかがわれる。②「読書が好きか」、多くの子供が好きと答えているが、前回調査と比べると割合が減少している。③「読書は大切だと思うか」、ほとんどの子供が大切だと答えている一方、⑤マンガを含まない本の不読率は前回調査から増加している。⑧電子書籍より紙の本を読む子が多く、⑨マンガについては、先ほどの本の不読率と比べると、本よりもマンガのほうが読まれていない。⑩新聞についても、特に中高生でほとんど読まれていない。という結果になっている。

アンケート全体の集計・分析を終えたら、あらためてお示ししたいと考えている。

資料の説明は以上となるが、参考資料を紹介する。参考資料1として第1回専門部会で事務局から説明した第4次計画の取組、また参考資料2・3として、国が進めている計画・有識者会議の動向についての資料となっている。

以上の内容により、今年度、京都府子どもの読書活動推進のための取組指針を策定してまいらう。どうぞ、よろしくお願いいたします。

(委員からの主な意見)

【笹岡委員】 数値目標は特にないのか。

【事務局】 取組の方向性や達成度を検証するためには、何らかの指標が必要である。国も示している「不読率」がひとつのキーワードとなるが、本の冊数にこだわるのが良いのかどうか悩むところである。第1回の読書専門部会においても東京大学の酒井教授から印象的な提言をいただいた。多読だけにこだわるのではなく同じ本を何度も読んで、思索して考えを深めていくということが大事で、「再読率」が重要ではないかのご意見をいただいた。この御提言も取り入れながら今後進めていく取組の延長線上にどのような子どもの姿があるかを検討しながら目指すべき指標を考えていきたい。

【事務局】 市民の方々にも、どのように前向きに読書活動推進の取組を進めていただくか検討したい。インターネットが普及し、本を読む時間が取れない状況ではあるので、読む時間を増やしていくという方策だけでは難しいと考えている。前向きに進められる方向を考えていきたい。

【野口委員】 「再読率」は興味深い指摘である。ただ、乱読したなかで気に入った本を見つけて再読する、という流れかと思うので、読まない人は結局読まない、となってしまう。ネガティブな発想ではあるけれど。

【事務局】 従来から「読書マラソン」という冊数にこだわる取組を進めている。こちらも有効性を意識したうえで進めているが、まずは「出会い」があって、「気に入った本」を見つける、という流れかと思うので、「多読」か「再読」か、どちらかに振り切るのではなく、理論を整理したうえで方向性を決めたい。

【野口委員】 「再読」の調査はやるべきだと思う。

【松山委員】 小学校・中学校の図書館は、学校ごとに置かれている本に特徴があるのか。

- 【事務局】 選書会の持ち方は学校により異なり、先生のみで行っている場合と、保護者や子どもも入れて行っている場合がある。
- 【事務局】 学校では、本を読ませないといけないという意識がある。
- 【稲田教育長】 司書教諭や司書が選んでいる学校もあるが、子どもが選んでいる学校もある。また、学校予算は裁量で融通が利くようになっているが、「図書費」だけは、執行下限額を示し、裁量で減らせないようにしている。
- 【松山委員】 アンケートを見ると、中学校で特徴的な結果が出ているように思う。「本を読むことが好きか」という項目と「本を読むことが大切か」という項目では、中学校だけが下がっている。普通、学年が上がるにつれ、だんだん減っていくものかと思うから特異な気がする。反面、「電子書籍を読む割合」は高くなっている。これはコロナ世代である、ということと関係するのではないのか（図書館で本を借りることが出来なかった頃）。今後、そういった視点での分析もあってしかるべきかと思う。
- 【事務局】 中学生の特徴的な結果についてはご指摘のとおりである。その分析を進めるにあたっては、このアンケートが京都市立学校を対象としており、高校生に府立高校生が含まれてないゆえ、高校生の結果に偏りが出ている可能性があることも念頭に置く必要がある。
- 【稲田教育長】 G I G A端末が導入されたこともあるかと思う。紙の本と電子書籍については、どちらが悪いということはなく、併用していくことになる。
- 【松山委員】 日本では電子書籍が普及していない。著名なマンガの作者と話した時に、電子書籍では、読んだ感がなく、何ページまで読んだかがわからないし、読書の楽しみの1つである読み切った感がないということが話題になった。そういったところが原因かと思う。
- 【事務局】 酒井先生も、電子書籍は紙の本が元々持つ特徴を代替できる機能はないと話しておられた。
- 【野口委員】 電子書籍の良さは、字を拡大できるところ。ただ、その利点は一般的に、子どもたちには活かせない。
- 【事務局】 アンケートにはいくつか自由記述欄があるが、「なぜ紙の本を読むか」というところで、「電子書籍は読みにくい」とか、「電子書籍だと読む気がわからない」という意見もある。子どもの生の声として、今後分析が必要かと思う。
- 【野口委員】 電子書籍だと挿絵などをばらばら見られないし、一長一短かなと思う。
- 【石井委員】 読書の問題は、デジタルデトックスの問題とも関連するだろうと思う。国で学習の基盤となる資質能力といったものを情報活用能力と言語能力とに整理しようとしている動きがあるが、これは重要だと思っている。それぞれをどう定義するかということはあるが、I C Tで、情報活用能力と読解力が解消されるものではないと思っている。紙という媒体で活字を読んだり書いたりすることは、電子媒体とは違う、という研究成果が出ていると思う。深く読む場合はやはり紙の方が良い。なぜなら、めくる感覚もそうだが、全身運動になっているところもあり、微妙に傾けながら読むなど、無意識のうちに調整しながら読んでいる。最近スマホ認知症などと言われるが、電子は情報量が多く、ブルーライトもあるので疲れてしまい、中毒性もある。疲れてしまうから深く読めないし、情報をスキャンするにはいいとされているが、本当に読む、深く読むということは難しいとなると、再読する対象にはなりにくい。基本、デジタルは情報をスキャンすることには長けているもの。「古典」というのは再読することに価値がある、ということになるが、そのように「再読」は、紙だからこそできることであり、紙は読みつづす、みたいな読み方もあり、それが紙の醍醐味とも言える。「再読」に関して、高校でよく言うのは、高校と大学で何が違うかと言うと、大学では同じテキストを何度も読んで学ぶのが大学の学びですよ、と言っている。野口委員がお話されたように、本にたくさん触れているからこそできること。逆に、幼児期においては、おもしろいと思ったものを何度も読みなおすことがあったりする。本は何度も読むからこそいい。再読に値する本をどう選定するかが大切で、

それとセットで考えることが重要。日常生活では再読することはほぼないが、学校の国語は、再読というか、読めているつもりが読めていないということに気付くためにこの授業があると思っている。読書はとても大事だと思う。

【稲田教育長】 若いときに読んだものをもう一度読むと、全然読み方が違っているということもある。

(4) その他

○教育長から、前会会議以降の主な出来事等について報告

6月21日・22日 令和7年度 京都市・乙訓地域公立高校合同説明会

6月25日 文教はぐくみ委員会

○事務局から、当面の日程について説明

(5) 閉会

10時50分、教育長が閉会を宣告。

署 名 教育長